

自閉症スペクトラム障害児・者のこだわりに対する 支援者の捉え方と対応に関する研究

○本郷 薫
(横浜市立若葉台特別支援学校)

奥住秀之
(東京学芸大学)

KEY WORDS: ASD 発達障害 こだわり

I 目的

DSM-5によれば、こだわりとは、自閉症スペクトラム障害(ASD)の診断基準の一つであり、「同一性への固執、習慣への頑ななこだわり、または言語的、非言語的な儀式的行動様式」を指す。自閉症児の日常の生活行動のなかで、同一性保持への欲求に基づくこだわり行動は、ASD児・者の重要な特徴の一つであるが、この点に焦点を当てた研究はまだ少ない(佐々木, 2009)。家庭や学校そして施設等においては、大変多くのこだわりが見られ、それがASD児・者の教育・療育や処遇・対処に困難さを引き起こしている事実があるという報告や(佐々木, 2009)、こだわりなどの行動がなぜ発現するかについて、不安やストレスを感じているときにみられやすいなどの報告がある。こだわりの背景や関連要因を把握し、子どもが安心感を得られるようにすることが基本であるとの指摘もあることから(金生, 2016)、こだわりのあるASD児・者を取り巻く周囲の人々の意識や対応を調査することは重要であると考えられる。以上より、本研究では、教員、保護者、大学生を対象に、こだわりの捉え方や対応について検討することを目的として、評定法による質問紙調査を行う。

II 方法

(1)調査参加者: 教員173名、保護者98名、大学生277名、計548名から調査参加の承諾が得られた。そのうち、特別支援学校教員133名、小学校教員21名、保護者90名、大学生263名、計507名から有効回答を得た。
(2)調査項目: I. フェイスシート: 教員、保護者、大学生によって異なる。年齢、性別の他、教員は教員歴等、保護者は子どもの教育の場等、大学生は専攻等について回答を求めた。II. こだわりの捉え方に関する項目: こだわりの捉え方に関する項目22項目を作成し、それぞれ「1: 全く思わない」から「4: とても思う」までの、肯定的に答えるほど得点が高くなるように設定した4件法で回答を求めた。
(3)分析: 1) こだわりの捉え方に関する因子構造を探るため、22の項目について、主因子法、バリマックス回転による、探索的因子分析を行う。2) 特別支援学校教員、小学校教員、保護者、大学生による全般的なこだわりの捉え方の違いを探るため、因子分析によって抽出された各因子について、回答者それぞれの下位尺度得点の1要因4水準の分散分析を行う。

III 結果

こだわりの捉え方に関する因子構造: 分析の結果、13項目で4因子が抽出された。第1因子は「妨げ因子」、第2因子は「背景あり因子」、第3因子は「減らすべき因子」、第4因子は、「変化する因子」と命名した。各因子について、Cronbachの α 係数を算出した結果、第1因子が.83、第2因子が.74、第3因子が.76、第4因子が.71であった(表1)。
こだわりの捉え方の違い: 分散分析の結果、群間の得点差は、妨げ因子、減らすべき因子、変化する因子において1%水準で有意であった(それぞれ $F(3,503)=8.74, p<.01$; $F(3,503)=33.28, p<.01$; $F(3,503)=5.51, p<.01$)。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、妨げ

因子においては、保護者が、特別支援学校教員、大学生よりも有意に高い点数を、減らすべき因子においては、特別支援学校教員、小学校教員、保護者が大学生よりも有意に高い点数を、変化する因子においては、特別支援学校教員、保護者が、小学校教員よりも有意に高い点数を示していた。

IV 考察

全般的なこだわりの捉え方は、「妨げ」「背景あり」「減らすべき」「変化する」の4因子構造であるという結果が示された。妨げ因子の構成項目から、こだわりは一つの場面においてではなく、あらゆる場面で妨げとなるものだと捉えていることが考えられる。背景あり因子の構成項目から、何らかの背景からこだわりが生じていると捉えている者は、こだわりの背景には様々な要因が存在していると捉えていることが考えられる。変化する因子の構成項目から、こだわり行動何らかの要因で変化するものと捉えている者は、こだわりは一つの要因からではなく、あらゆる要因によって変化するものだと捉えていることが考えられる。

回答者それぞれの各因子の下位尺度得点を比較した結果、妨げ因子、減らすべき因子、変化する因子において得点差が有意となった。保護者は、特別支援学校教員、大学生よりも強くこだわりを妨げと捉えているという結果となった。保護者は子どもと関わる時間が長く、様々な生活場面を子どもと共に過ごしていることが影響していると考えられる。また、特別支援学校教員、小学校教員、保護者は、大学生よりも強くこだわりを減らすべきと捉えているという結果となった。大学生はこだわりの実態に触れる機会が少ないことが影響していると考えられる。更に、特別支援学校教員、保護者は、小学校教員よりもこだわりを変化すると捉えているという結果となった。小学校教員は、特別支援学校教員や保護者よりもこだわりの実態に触れる機会が少ないことから、こだわりについて変化するものだと捉えるまでに至らないのではないかと考えられる。

表1. 全般的なこだわりの捉え方に関する因子構造(主因子法・バリマックス回転)

項目	因子				共通性
	妨げ	背景あり	減らすべき	変化する	
こだわり行動は、日常生活の妨げとなることがある。	.84	.08	.17	.05	.75
こだわり行動は、学習の妨げとなることがある。	.75	.11	.21	.11	.62
こだわり行動は、就労の妨げとなることがある。	.68	.10	.20	.15	.54
こだわり行動は、安心感を求めて生じる。	-.02	.72	-.10	.08	.53
こだわり行動は、不安から生じる。	.11	.69	.07	.18	.53
こだわり行動は、それをしないと気がすまない、落ち着かないために生じる。	.16	.67	-.05	.01	.47
こだわり行動は、確認をしたために生じる。	.04	.49	.19	.14	.28
こだわり行動は、減らしていく方が良い。	.19	.07	.81	.04	.70
こだわり行動は、改善していくほうが良い。	.20	.09	.77	.13	.65
こだわり行動は、やめさせる方が良い。	.15	-.07	.53	-.01	.31
こだわり行動は、環境によって変化する。	.05	.12	-.05	.86	.75
こだわり行動は、年齢によって変化する。	.17	.11	-.01	.67	.48
こだわり行動は、指導によって変化する。	.04	.11	.18	.51	.31
因子寄与	1.90	1.76	1.73	1.55	
累積寄与率	14.59	28.13	41.44	53.36	
α 係数	.83	.74	.76	.71	

文献

1) 佐々木博人(2009). 聖トマス大学人文科学研究室紀要, 12, 29-65. 2) 金生由紀子(2016) 子どものこだわりの芽生えと発達. 児童心理, 70(14), 12-17.

(HONGO Kaoru, OKUZUMI Hideyuki)